

えでぴあ

立川と語ろう 立川に生きよう

January 2024

Écoutez Bien Vol.40 No.466

1

宗教の誤解を解きたい

表紙／新年の光を浴びて（残堀川）





田堀の蕎麦

そばがき揚げも忘れずに

幸町の手打蕎麦

季節柄、温かいお蕎麦もおいしいけれど
香り高くシャキッとした食感、冷たいお蕎麦は外せない

大きくてプリプリの牡蠣が入った牡蠣南蛮。温かいお蕎麦です。冷たいお蕎麦を温かい牡蠣の汁につけるのは、牡蠣汁。季節が届けてくれるごちそうです。もちろんいつも通りの鴨汁も美味しい。寒くても食べたくなるのが、辛み大根のおろし蕎麦。蕎麦の香りが一層増すような気がします。だし巻き卵もおいしいし、鴨の燻製もおいしいし、でもやっぱり外せないのは、そばがき揚げ。ハフハフ言いながら、熱々をタレにつけて召し上がれ。



蕎麦の美味しさを引き出す辛い大根、ベストマッチ。



そばがき揚げ。揚げてもさっぱり。



牡蠣南蛮そば。絶品。



つきたてのお餅のようなそばがき。
口に入れるとねっとり、いい里芋のような食感



冷酒が出ると、昼からでも飲みたくなるとお客様

手打蕎麦 田堀
立川市幸町3-34-4 TEL 042-536-0291
定休日 毎週火曜日と第3月曜日
営業時間 11:00~15:00
(お蕎麦が無くなると終了することもあります)

国立極地研究所 創立50周年記念

緑の生き物に頼る未来

20億年、30億年の積み重ね

水の中で暮らす生き物が、
途方もない時間をかけて貯めてきたものを、人間が一気に燃やして、
人間のためにまた緑に頼らざるを得ないのは、なんとも虫のいい話なのだが。



ネットでも公開しています

——ご無沙汰しています。前回インタビューさせていただいたのは10年くらい前でしたか。

工藤 15年じゃない？ 51次が南極に行く前だから。2008年の夏ころだよ。

——先月出発したのが65次ですものね。先生もよく南極に行っていましたよね。

工藤 毎年ね。40次越冬隊から始めて、41次で戻り、42次はお休み、43、44次は夏隊、45次でまた越冬して、46次で帰ってきて、47次はお休みして、48、49は夏隊、51次で越冬隊長、52次で戻ってきて、55次の夏隊、55次はスペインの基地の方に行って仕事して、そこでおしまい。かみさんがガンで死んじゃったから。娘はもう大きかったけど、息子がまだ小学校1年でさ、そいつを育てなきゃならなくて、9年前から南極には行ってない。

——ええ！

工藤 南極には行きたかったし、残念だったけど、データだけは取ってきてもらうように頼んで、データや試料を集めてきてもらって、分析したりして。

——奥様、頑張ってたんですね。

工藤 かわいそうだったよね。子育てって大変だなと思うよ。昨年、大学院生が1人博士を取ってくれたんだけど、息子の子育てよりそっちの方が100倍楽だった。

——奥様が亡くなられて痛手だったんですね。

工藤 無茶苦茶痛手だったよ。すごくいい奥さんだったから。あんたは飲んだくれの不摂生で、あんたの面倒は私が最後まで見るんだと言っていたのに、なんのことはない。

先に逝っちゃって、さ…。それは南極観測の裏話（笑）。

——理解のある奥様だったんですね。こちらから見てみると、よく南極に何度も行くなあと思いますよ。

工藤 これがたまたま面白んだよ。自分にしかできないことがあるって思えるのが幸せでね。そこにチャレンジしながらここまで来ちゃった。

——南極で生物と言えば、一般人はペンギンを思いますが、先生は何の研究をされているのですか。

工藤 南極の水辺や湖の中で暮らす生き物を研究している。残念ながら河童がいるわけじゃないけど、そんな未知の生き物がいたらいいなと楽しみにしてる、けど、魚にですら出会わない。植物か目で見えない小さいものの世界。湖ができたのが6000年ほど前で、縄文時代に南極大陸を覆っていた水がスッとなくなって、陸地が出てきたところに湖ができた。人間はそのころから農業を始めて空を飛んで宇宙へ行くまでになっただでしょ。小さな生き物もまた湖の中にいろんな世界を創ってきているんだよ。そんな研究だから、いつも驚きがいっぱいなんだ。——そもそも、生物の研究に越冬って必要なんですか。真っ暗じゃないですか。寒いし。**工藤** 越冬の必要性はある。生き物はね、一番イキイキしているのは冬が終わった直後。そこから「やるぞー！」っていうオーラを感じることができるんだよ。湖は凍るけど、氷の下には水があって、寒くても零度くらいにしかならない。——生物にしたら快適なんですね。

工藤 そう思うでしょ。それがね一概にそうとも言えないというのが最近わかってきた。そこにはまた別の物語があってさ、一年中温度が低いとやっぱり生きにくいよ。休めないから。

——おお、同じ温度だと休めないんですね。

工藤 凍ったり、溶けたりまた凍ったりして、夏の間だけ溶けて水があったり、光が当たったりという所に生きている生き物がいるんだけど、そいつらは凍っている間は完璧に眠っているの。仮死状態というか休眠状態と言うんだけどね。そうすると、寿命は無限大なのよ。すごい生き方を身に着けていて、呼吸すらしない、何もしないんだ。水で戻せば、また戻って生き始める。そういうやり方を身に着けた生き物が、湖と陸地の狭間にいるの。それを知るためには、やっぱり越冬なんだよ。

——なるほど。生物の領域でも、この50年で何か大きな発見ってあったんですか。

工藤 生き物が極限の状態でどういう応答をするかがだんだん見えてきたよね。南極観測の初めの頃には、南極に何がいるの？ から始まって、それに対して、ここにはこんなモノがいるとわかり、次にそれが一体そこで何をしているの？ という問いになり、そのQ&Aが連綿と繋がっている。例えば、動物が海のどこまで潜って、何を食べどんな行動をしているかがわかってきた。湖の中にも生き物の世界があるっていうのがわかったのは、南極観測を始めて30年～35年過ぎてから。36年目に入ったら、湖の中になんか太古の遺跡のような世界があるじゃんって見つかって、そこから私が越冬し



て40次隊から51次隊くらいまでの間に、生き物がどう活動しているかがわかってきた。そして、これはまだ手を付け始めたばかりなんだけど、じゃあ、湖ができてから6000年の間、生き物がどういう社会を作って、どういう風に遷移・変遷してきたかっていうのを堆積物をとって時間と共に追いかけていこうかなと、それを今やっています。

——湖ってみんな同じじゃないんですか。

工藤 湖ごとに形が違う。流域や湖面の面

積や深さなど、サイズの違いがあったり。そうすると蒸発する量だったり流れ出てくる水の量とかが違ってくる。物流が違っていると、例えば適切かアヤシイですけど、秋田県状態になったり東京都状態になったりで、湖の中の環境がどんどん違ってくる。地球上最高のしょっぱい湖ができた、最高に澄んで綺麗な水を湛えたり、それは考えてみると、ある時、宇宙で星が誕生し長い時間をかけてちょうどいい塩梅にあった地球や他の天体にできているかもしれない生物社会の縮図を見ている気がしているんですよ。

——なるほど。

工藤 6000年前に氷で覆われて何もなかった所から、氷が去って穴ぼこがいっぱいできた。そこに色々な水や大気が、あるいは融け水から侵入してきた生き物が入り込んで社会を作るわけよ。社会なら、物流が違ってくると、6000年の間にはだいぶ様子が違ってくるでしょ。海と似たような環境もあれば、淡水の環境もある、そういった所にそれぞれ独特の生き物が活動している。

——そういう中に、無限の寿命を持つものもでてきたわけですね。

工藤 そう。融け水と湖の間をつなぐ湿地。そこには凍っている間は寿命を無限化して、目覚めると活動再開して生を謳歌する、そんな生き物がいるのよ。ところが休むことなく始終活動しなきゃならない環境だと、疲れちゃう。活動するとやがて来ちゃう寿命で死は免れない。凍結融解を繰り返す狭間で暮らすやつらって、卵は卵のまま、子どもは子どものまま、大人は大人のままで生命活動を止める、生き物としての時間を停止させ、モノとして存在するようなんだ。目覚めるとそこからリスタート。

——そうになりたいとは思わないけれど、興味あるなあ、寿命無限大。

工藤 面白いでしょ。

——面白い。ところで、今異常気象をもたらす温室効果ガスについては、生物でなんとかならないのですか。

工藤 まあ、地表の緑と水中の青に頼るのかな。紫外線が強烈に地上に降り注いでいた時代から、水の中で繁殖した生き物たちは酸素を作って空気中にいっぱい出してきたわけだよ。地球上の酸素濃度が20％とかになるまでに、20億年とか30億年とかかかっている。ようやく地上で生きることができる紫外線強度になったところで、人間が貯まっていた石炭とか石油とかを掘り出して燃やしちゃった。数億年かかって貯めたものを一気に排出しちゃったわけ。当然バランスがとれなくなって、二酸化炭素は増えるわけだよ。それをまた青や緑に何とかしてくれというのは、ものすごく虫のいい話だけど。でもやれるとしたら、やっぱり生き物たちに二酸化炭素を固定してもらう、何億年かかかるかもしれないけど。それまで人類は活動停止、絶滅したふりをして進化のチャンスを待つのかな。

宗教の話をしましょう

宗教を考えるための第一歩に向かって

2024年2月18日(日)、立川商工会議所会議室において

藤井健志先生を講師に迎えて講演会が行われる

テーマは、なんと「宗教」!

——大学で宗教学を専門に選ばれたのはなぜですか。就職先があるとは思えないのですが。

藤井 そうですね、まったく考えてなかった。宗教学の先生が面白かったので、そこへ進んだんです。東大2年の時に、柳川啓一という教授がいて、その人が授業でこう言ったんですよ。「君たちは宗教のことを宗教だと思っているだろう。しかし、宗教は文化でもあるんだ」と。なるほどと思ってね。それからだんだん宗教が面白くなってきました。

——でも、今の日本で宗教の話をするというのは、タブーに近い。

藤井 だからこそ、宗教を考える際の誤解がすごく多いという話をしたいと思っています。

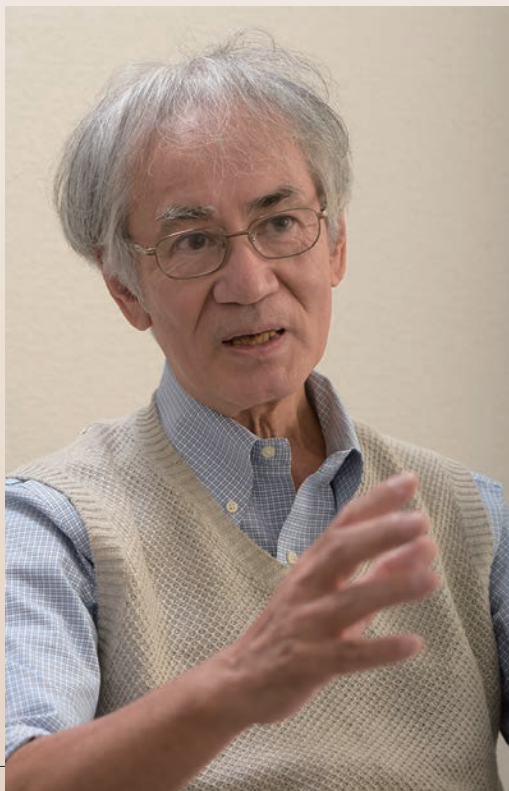
——この講演会の主催は…。

藤井 宗教情報センターです。

——ああ、真如苑さんのブチ研究機関ですね。どの宗教団体もこうした研究機関をお持ちだとか。

藤井 そうですね。前もって申し上げておきたいのは、1つには私は真如苑の信者ではないということ。もう1つには、私は今、宗教情報センターの依頼を受けて、アドバイスなどしているのですが、こうした真如苑が持っている世俗的ポテンシャルを引き出せばいいなと思っています。

——というのは、私は東京学芸大学の副学長をやっていた時に広報も担当していて地元の人と会ったりしました。その時にかなりショックだったのは、学芸大学って東京ドーム6個分くらいの敷地面積があるのに、地域の人たちからなんの存在感も感じないと言われたことでした。考えてみたら、私自身それまで30年近くこの大学で教鞭をとっていたけれど、地域との交流は皆無だった。で、やっぱりこれは良くないと考えを改めて、学芸大の特色である豊富なパリエーションの先生たちに協力していただいて、地域に学校を開く試みをしました。真如苑さんも同じではないかと思っ



ています。立川に住んでいると、いたるところで「真如苑」の文字は目に入りますよね。フラッグだったり、花火とかの寄付名簿を見ると名前が載っていたりするので、存在は知っている。でも中で何をやっているかはわからない。僕は、それはとてももったいないことだと思う。真如苑さんには、立川市や多摩地域のためにもっと働いてもらいたいし、僕も立川市民ですから、市民としては立川に真如苑さんがあってよかったなと思います。そんな思いでアドバイスをしています。

——ええ。

藤井 ただそれが真如苑さんの布教活動になってはいけけないので、宗教を研究している人への支援や、宗教に関する知識を広める活動を目に見える形でやれるといいなと思います。

——それにしても、今の日本で宗教を真っ向からテーマにするというのは勇気がいりますよね。日本人って宗教、いやなんですから。

藤井 日本人は2/3くらいが宗教に関心がないと、よく言われます。でも本当にそうでしょうか? 初詣を考えると、明治神宮も成田山新勝寺も、正月三が日で300万人くらいが参拝すると言われています。それに対して年1回行われるイスラムのメッカへの大巡礼は、200万人くらいです。数だけ見ると、日本の方がはるかに多い。他にも200万人以上が初詣に集まる社寺がいくつかありますものね。あれは年中行事だと言う人もいますが、神社やお寺という宗教的な場に行って、1年の幸せを神仏に祈願して、お賽銭、要するに社寺への献金をしているわけですから、立派な宗教的行動です。そう考えると、日本人は非常に宗教的です。

——でも、集まっている人に宗教の意識はありません。

藤井 そこが面白いところです。毎年、初詣に行き、またお盆やお彼岸に多くの人が墓参りに行っています。これらはすべて宗教に絡む行事です。これだけ宗教に関わることをやっ

ながら、それにもかかわらず、自分たちは宗教に無関心だと意識できるメカニズムが、日本にはあると考えています。それが何なのかという話をこの講演会でしたいと思っています。

——それは面白いですね。

藤井 それから日本人は宗教にいい加減だとよく言われます。結婚式はキリスト教の教会で行い、葬式は仏式でやったりするからね。日本ではごく当たり前のこうしたことを、節操がないと言う人は結構いるんです。そもそも宗教に無関心だから、どうでもいいんだと言う人もいます。でも僕はそうじゃないと思う。逆転させてみるとわかります。結婚式を仏教のお寺でやり、葬式をキリスト教の教会でやるっていう人はほとんどいませんよね。だから、いい加減に見えても、そこに実は何かのルールが

講演会の申し込み



上のQRコードか

こちらの申し込みサイトURLからどうぞ

<https://dx-mice.jp/EZEntry/cir-seminar/Entry>

あるんですよ。このルールは、日本人だったら絶対に間違えない。——なんだろう、その不文律。

藤井 ぜひ講演会へいらしてください。

——ほかにどんなお話をなさるのですか。

藤井 幕末ぐらいから現代にいたるまでの間に生まれた宗教教団を、新興宗教とか新宗教と言いますが、天理教や創価学会、真如苑も新宗教の1つだと私たち研究者は考えています。こうした新宗教の信者は、全体でどれくらいいると思いますか。

——500万人以上いるのではないですか。

藤井 新宗教を全部合わせると、信者数は1千万人以上いると考えられています。日本の人口の10%以上ですね。これに比べると、キリスト教は100万人あまりで、人口の約1%です。新宗教にはこれだけの信者がいるのに、学校ではほとんど教えないでしょ。これはおかしいと思

——でも大本教などは日本史で触れますよ。

藤井 弾圧を受けたということだけでしょ。大本は今でもありますよ。他にも大きな教団はかなりあります。それだけ社会的には大きな存在なのに、知らない人が多いです。

——昨今報道されている宗教団体があんなにお金を持っていたことも、その資金の集め方も知りませんでしたからね。

藤井 もっと知られていないのは、日本の新宗教の信者が海外にもとても多いということです。例えば韓国では、創価学会の信者が150万人くらいいると言われています。もちろん韓国人です。150万人って結構な数字だと思いますね。

——ええ、韓国の人口が5千万強ですから。

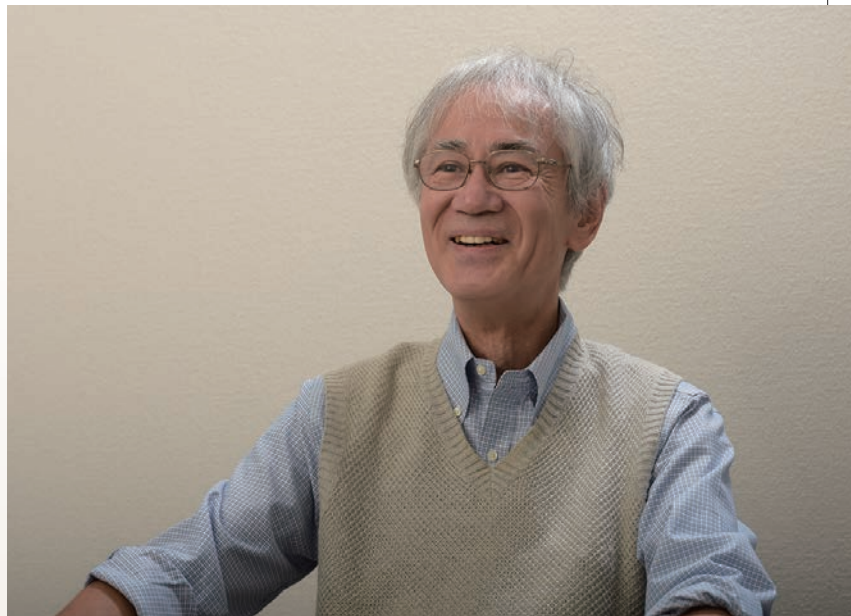
藤井 こうしたことを日本人はもっと知ったほうがいいと僕は思っています。多くの日本人が知らないことが、実際に宗教の世界で起こっているんです。

——新宗教の信者は熱心に信仰しているかもしれませんが、それ以前の、例えばお寺の檀家さんなどは信心しているつもりはないと思います。

藤井 まあ、そうですね。でもね、例えば浄土真宗では「説教」の伝統が残っている所がありますよ。いまだに全国をお坊さんが回っていて、阿弥陀仏や親鸞についての教えを説いている、つまり説教ですね。その話し方が1つのモデルになって落語が生まれたと言われて

藤井健志さん

1954(昭和29)年生まれ。東京出身。練馬区で育ったが、当時の練馬は近所で牛を飼っているような所だった。小中学校は石神井で過ごし、都立西高校から東京大学へ行く。東大では文学部宗教学科で学び、宗教学、日本宗教史を研究した。30歳で東京学芸大学へ、以後は学生に宗教社会学を教え、図書館長、副学長を経て現在は名誉教授。



——なるほど。

藤井 こうして聞いてみると、日本は非常に宗教的でしょう? それにもかかわらず、今の日本では宗教がタブーになっているんですね。触れにくい、話しにくい、考えるにくい。非常にもったいないと思います。私は、宗教は必要なものだと思っているので、宗教のことを抵抗なく考えられるような道を開きたいと思っています。その第一歩が今回の講演会です。——宗教って危険なイメージがあるんです。触らぬ神に祟りなしって言うじゃないですか。

藤井 そういう場合、宗教という言葉を使っていますが、宗教教団と同じ意味で使ってますよね。宗教という文化的、社会的なものの一部に宗教教団がありますが、宗教=宗教教団ではない。でも現代の日本語では、宗教という言葉

——壁は高くって厚いですね。

藤井 でも1人でも2人でも、そうだなと思ってくれる人がいたらいいなと思います。ほくにとってではなく、その人にとっていいことなんです。——自分が本尊だ、自分は弱くないとか言う人がいますよ。

藤井 そうそう、それもよく言われますよね。でもそういう考えも、本人や周囲の人に死が近づいてきたら、絶対に崩れると確信しています。——崩れる瞬間でもいいから宗教に触れたらいい?

藤井 まあ、それでもいいのですが、僕は宗教にはそれ以上のものがあると思うんです。できれば早い時から宗教に触れながら生きていった方が、楽しいんじゃないかなと思いますね。

——今度の講演会、楽しみにしています。せっかく生まれてきたのだから、楽しく生きた方がいいですね。ありがとうございました。



銭湯の絵



えくてびあんの写真から

2023年6月末に、柴崎町にあった高砂湯が閉店しました。えくてびあん1989年3月号には、高砂湯は「昭和8年創業、立川一の老舗である」と書いてあります。時代の流れとはいえ、寂しいことです。えくてびあん同号には、立川のお湯やさんの背景画ほとんどを手掛けた丸山清人さん、その若き姿も掲載されています。丸山さんと言えば、数少ない銭湯背景画絵師。立川市立第六小学校では丸山さんを迎えて「銭湯絵教室」を開催していました。お風呂の壁画と言えば富士山ですが、竜宮もそのテーマのひとつだったのだなあとかつての掲載写真を見て、改めて思いました。

季節は冬。身も心も温まりたい。そんな時に銭湯はありがたい存在。スーパー銭湯もいいけれど、こじんまりして生活の一部になっているお湯やさんが、やっぱり身近でいいですね。

さて前号に北口駅前のペDESTリアンデッキを取り上げました。初代のペDESTリアンデッキは青（水色）でした。赤になった時は衝撃でしたが、今となるとなかなかいい色ですよね。

